

復活節第5主日礼拝説教「選ばれたあなたへ」

日本基督教団石神井教会 2019年5月19日

【旧約聖書日課】申命記 7章6～11節

⁶あなたは、あなたの神、主の聖なる民である。あなたの神、主は地の面にいるすべての民の中からあなたを選び、御自分の宝の民とされた。⁷主が心引かれてあなたたちを選ばれたのは、あなたたちが他のどの民よりも数が多かったからではない。あなたたちは他のどの民よりも貧弱であった。⁸ただ、あなたに対する主の愛のゆえに、あなたたちの先祖に誓われた誓いを守られたゆえに、主は力ある御手をもってあなたたちを導き出し、エジプトの王、ファラオが支配する奴隷の家から救い出されたのである。

⁹あなたは知らねばならない。あなたの神、主が神であり、信頼すべき神であることを。この方は、御自分を愛し、その戒めを守る者には千代にわたって契約を守り、慈しみを注がれるが、¹⁰御自分を否む者にはめいめいに報いて滅ぼされる。主は、御自分を否む者には、ためらうことなくめいめいに報いられる。¹¹あなたは、今日わたしが、「行え」と命じた戒めと掟と法を守らねばならない。

【使徒書日課】ガラテヤの信徒への手紙 3章23節～4章7節

³23信仰が現れる前には、わたしたちは律法の下で監視され、この信仰が啓示されるようになるまで閉じ込められていました。²⁴こうして律法は、わたしたちをキリストのもとへ導く養育係となったのです。わたしたちが信仰によって義とされるためです。²⁵しかし、信仰が現れたので、もはや、わたしたちはこのような養育係の下にはいません。

²⁶あなたがたは皆、信仰により、キリスト・イエスに結ばれて神の子なのです。²⁷洗礼を受けてキリストに結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ているからです。²⁸そこではもはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです。²⁹あなたがたは、もしキリストのものだとするなら、とりもおさず、アブラハムの子孫であり、約束による相続人です。

⁴つまり、こういうことです。相続人は、未成年である間は、全財産の所有者であっても僕と何ら変わるところがなく、²父親が定めた期日までは後見人や管理人の監督の下にいます。³同様にわたしたちも、未成年であったときは、世を支配する諸霊に奴隷として仕えていました。⁴しかし、時が満ちると、神は、その御子を女から、しかも律法の下に生まれた者としてお遣わしになりました。⁵それは、律法の支配下にある者を贖い出して、わたしたちを神の子となさるためでした。⁶あなたがたが子であることは、神が、「アッバ、父よ」と叫ぶ御子の霊を、わたしたちの心に送ってくださった事実から分かります。⁷ですから、あなたはもはや奴隷ではなく、子です。子であれば、神によって立てられた相続人でもあるのです。

【福音書日課】ヨハネによる福音書 15章12～17節

¹²わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である。¹³友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。¹⁴わたしの命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友である。¹⁵もはや、わたしはあなたがたを僕とは呼ばない。僕は主人が何をしているか知らないからである。わたしはあなたがたを友と呼ぶ。父から聞いたことをすべてあなたがたに知らせたからである。¹⁶あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るようにと、また、わたしの名によって父に願うものは何でも与えられるようにと、わたしがあなたがたを任命したのである。¹⁷互いに愛し合いなさい。これがわたしの命令である。

「神の子よ」

キリストのご復活を祝ったイースター（復活祭）から五週目、「復活節」も後半を迎え、次の祝いときであるペンテコステ（聖霊降臨祭）への備えが少しずつ始まっています。教会の子どもたちとは、今日からペンテコステの祝いのための準備を始めました。皆さんにも、ペンテコステの祝いの礼拝のご案内を、今日からお配りしています。何よりも、先週の役員会で一人の洗礼志願者の試問会を終えましたので、わたしたちの教会は、ペンテコステに向けて新しいキリスト者の誕生に備えることになりました。

最近では、どの教派・教会でも成人の洗礼式はイースターに執り行うことが多くなっているようです。古い時代の教会がもっぱらイースターに洗礼式を行うように暦を作ってきたという理解から、そのようになってきたのでしょうか。わたしも牧師として、洗礼を志願される方に、イースターの祝いの中での受洗をお勧めすることが少なくありません。主イエスが死んで復活されたことを記念し祝うイースターは、わたしたちが古い自分を捨ててキリストと共にある新しい命を生き始めることをしるしづける洗礼を受けるのにふさわしいときだからです。

実際には、ペンテコステの祝いに合わせて洗礼をお受けになることになる方も、少なくありません。ペンテコステは、キリストのご復活を信じて集まり共に祈っていた弟子たちのもとに神からの聖霊が与えられ、神の御業を宣教する教会が歩み始めた、ということをお祝いするときです。その最初のペンテコステのときに弟子の一人ひとりに注がれた聖霊が、現代に生きるわたしたちにも注がれているということ、教会は、洗礼式、あるいは幼児受洗者の堅信礼の中で確かめてきました。洗礼式で水が注がれた後、あるいは堅信礼の最後に、牧師が受洗者の頭に手を置いて祈るとき、教会は、「この人にも神の聖霊が与えられている」ということを宣言しているのです。そして、そのとき教会は、使徒パウロの教えに倣って、「この人も神の子です」と宣言しているのです。

間もなく迎えるペンテコステに、わたしたちの教会の群れの中で「神の子」が新しく生まれるでしょう。新しい命が生まれるというとき、ある日突然赤ん坊が届けられるわけではありません。わたしたちは、生れ出る前、すでに母の胎に宿ったときから、その命が育まれてきていることを、知っています。生まれ出る赤子を迎えるために、すでに命の日々を重ねてきたわたしたちは、良い備えをしなければいけません。教会という「信仰の家族」の一人ひとりには、新しく生まれ出てくる命を迎え、受け入れ、育てていくための役割があるのです。

残念ながら、わたしたちの目は時に曇ってしまうことがあるようで、お互いを「神の子」として見るができなくなることもあります。けれども、そのようなときにこそ、わたしたちは、思い起こしましょう。使徒パウロは、ただわたしたちが「アッパ、父よ」と祈る言葉を知っているというだけで、お互いを「神の子」と呼んだのです。それは、かつてイスラエルの民を「**聖なる民**」「**宝の民**」と神がお呼びくださったこと、主イエスが弟子たちを「**わたしの友**」とお呼びくださったこと、それらのことに並ぶことなのです。

「あなたがたを選んだ」

今日の福音書日課（ヨハネ 15 章）は、主イエスが十字架につけられる前の晩、弟子たちと最後の食事をされたときにお語りになられた言葉です。弟子たちにとって、その晩に主イエスがお語りくださった言葉は、どれほど強く心に残ったことかと思えます。主イエスもまた、特別な思いで弟子たちに最後の教えをお語りくださったのでしょう。主の御言葉は、実に単刀直入です。

「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。」

牧師として洗礼を志願される方との準備に際して、必ず最初に読んで確かめる御言葉です。多くの皆さんも、主イエスのこの御言葉を心に刻んで洗礼をお受けになられたのではないのでしょうか。

わたしたちは、実際には、自分の意志で選んで教会に通うようになり、自分で決断して洗礼を受けた、と思っているところがあります。日曜日ごとの礼拝も、わたしたちは、自分の意志で出席したり欠席したりを決めているつもりでいます。もちろん、子どもたちや学生であれば、親や学校に指示されて教会に出席するということがあります。そうだとすると、日曜日の教会にいるどなたも、強制的にここに連れて来られたとは思っていないでしょう。渋々でも、仕方なくでも、それでも自分の意志で、ここに留まっている。そう思っています。

主イエスの弟子たちも皆、そう思っていたことでしょうか。と言うと、疑問に思われる方もあるかもしれません。各福音書の最初の数章には、弟子たちが主イエスに従うようになった出来事が伝えられていますが、わたしたちがよく知っているのは、四人の漁師たちや徴税人だった者が「わたしについて来なさい」と主イエスに言われて従ったという逸話です。皆、何と素直に主イエスの呼びかけに従ったのだろうと、むしろ彼らの不用心さを心配したくなる逸話です。しかし、実際には、弟子たちは自分の意志で従うことにしたのではないのでしょうか。少なくともヨハネ福音書は、ほとんどの弟子たちが、主イエスに招かれて従ったというよりも、誰かに主イエスのことを紹介されたり誘われたりして自分の意志で主イエスのもとに行き、従うようになったと伝えているのです。

そうであればこそ、主イエスが最後の最後にこのことを弟子たちにお語りになられたと、このヨハネ福音書は、はっきり伝えたかったのでしょう。

「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。」

弟子たちにとっては、主イエスのこの言葉は、いにしへのイスラエルの人々に告げられたあの御言葉を思い起こさせるものだったかもしれません。

「あなたの神、主は地の面にいるすべての民の中からあなたを選び、御自分の民とされた。」それは、イスラエルが他の人々よりも数が多かったとか、優れていたとかではない。むしろ、彼らは貧弱な者だったが、神は選ばれた。そう語られる申命記の御言葉を、弟子たちは皆ユダヤ人でしたから、幼いときから繰り返し聞かされていたはずです。「主イエスは、わたしたちを選んでくださった。わたしたちが強く優れているわけでもないのに、むしろ小さく弱い者であるのに、を選んでくださった」と、弟子たちの心に響いたはずです。

「互いに愛し合いなさい」

わたしたちが聖書を手にし、そこに教えられていることを学ぼうと教会に通うようになったとき、わたしたちの思いは、主イエスに弟子入りしてその極意を伝授してもらいたい、ということであったかもしれません。主イエスは、もちろん、その言葉と行いによって模範を示してくださいますから、わたしたちは、主イエスを師匠とする弟子として精進し励むこともできます。

そうであればこそ、わたしたちは、今日の御言葉で繰り返し命じられていること、「互いに愛し合いなさい」を実践しようとしてきました。心から愛し合う者となることを願ってもきました。師匠のようになることこそ、弟子としての生き方、生きる道、だからです。

けれども、わたしたちは、その実践をする中で、挫折もしてきたのです。親しかった者との間で、家族の中で、教会の交わりにおいてさえ、わたしたちは、互いに愛し合うことに失敗してきたと、正直に告白せずにいられません。少なくともわたしは、そう正直に告白することなく、ここで語る者としての役割を担い続けさせていただくことはできません。

主イエスは、弟子たちが互いに愛し合うことに挫折する者であることを、ご存じなかったのでしょうか。ご存じなくて、軽々しくも「互いに愛し合いなさい」とお命じになられたのでしょうか。そんなはずがありません。主イエスもまた、互いに愛し合うことに挫折されたお方でした。あの敵対してきた人々との間で、主イエスの愛は受け入れられませんでした。互いに愛し合っていると思っていた弟子たちとの間でさえ、主イエスの愛は弟子たちの愛を保ち続けることにはならなかったのです。しかし、それは、主イエスの愛が不十分だったからでしょうか。完全な愛ではなかったからでしょうか。そうではないでしょう。

神の愛さえ、そうだったのです。イスラエルの人々が神を軽んじて不平不満を募らせたり、自分たちの好む神の像を造ったり、神の御心を蔑ろにするような行動を取ったのは、彼らに対する神の愛が完全でなかったからでしょうか。そうではなかったはずですが。むしろ、神の愛が完全であるがゆえに、イスラエルの反抗はいつまでも許され続けたのです。神の愛を十分に受けとめられるようになるまで、彼らが神の御心にふさわしく応じられるようになるまで、神は忍耐してお待ちくださったのです。いいえ、今も待ち続けてくださっている。神の愛が完全だからです。

愛が不完全なわたしたちでも、その神の愛のあり方は想像がつかず。親の子に対する愛です。いつまでも待ち続ける。親として、子が、いずれは自分の心を分かってくれる友として向き合ってくれるようになる日の訪れることを願って、待ち続けるのです。主イエスは、だからこそおっしゃいました、「**あなたがたはわたしの友である**」と。だからこそ、わたしたちも、愛し合うことに挫折しながらも、なお主に倣って互いを待ち続けるのです。「わたしは、あなたを選んで愛する。あなたはわたしの友」と、互いに呼びかけ続けるのです。主の御言葉は、その日が必ず来るという約束なのです。